

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等することは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(最終回):

## 海外出張報告の極意——最後まで「英語に愛されないエンジニア」らしくあれ

<http://eetimes.jp/ee/articles/1403/19/news010.html>

海外出張は、会社への業務報告で幕を閉じます。しかし、「英語に愛されない」エンジニアが、一部の隙もない完璧な報告をできるとは思えません。実は、それでよいのです。英語に愛されないエンジニアは、“英語に愛されない”という、その特性を最後まで生かして、報告会を乗り切るべきなのです。最終回となる今回の実践編(報告)では、その方法をお伝えします。

2014年03月19日 09時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

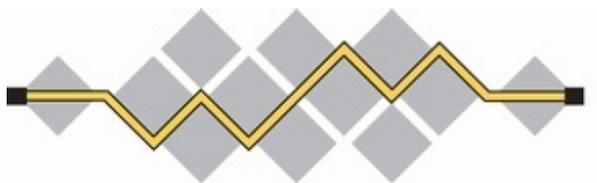
皆さんが今使っているPCで、いろいろなWebサイトや動画を見たり、テレビ会議を行ったりすることができるのは、これらを動かすための世界共通の決まり(プロトコル)を守っているからです。インターネット上での通信に関するこの「決まり」を作ってきたのが、「IETF」です。

IETFとは、Internet Engineering Task Forceのことで、インターネットの標準を規定する非営利の団体です。IETFには、会員と言う概念がなく、やりたい人がどんな提案してもよいことになっています。書いて提出するだけなら、誰も止めません(例えば、[こちら](#))。そして、その提案が受け入れられるか否かは、表向きは、このIETFミーティングの出席者の多数決で決定されることとなります(「[IETF惨敗記](#)」

)。

そして、ここが重要なのですが、あなた(のPC)は、IETFが決定したプロトコルに従う必要はありません。そんな法律はありませんし、従わないからといって罰則があるわけでもないのです。

ただ、IETFが決定したプロトコルは、世界中の人が「なんとなく使う」ので、あなた(のPC)もそれに「乗れ」ば、世界中のPCやサーバとつながって、電子メールやツイッター、YouTubeを楽しむことができる——それだけのことです。



**I E T F**®

「IETF」のロゴ 出典:IETF

「世界中の人(のPC)が、IETFがなんとなく決めた通信プロトコルを使う」→「なんとなく、そ

のプロトコルが普通になる」→「そのうち、そのプロトコルを使わないと、インターネットの世界で仲間外れにされてしまう」

要するに、IETFが決める通信プロトコルというのは、ひと言で言うと「英語」のようなものです。

十数年前、日本で通信機器を製造するメーカー各社は、このIETFの動向を血眼になって追っていました。IETFで決められる通信プロトコルで動く機器を作らないと、世界中のどの機器とも通信できないことになり、誰にも売れないモノになってしまうためです。

タイミング的には、IETFでプロトコルが決まった直後に、製品がリリースできれば最高です。最初に、市場に製品を投入できるからです。

ですから、海外で、一週間ぶっ続けで、10を超えるイベントホールで同時に開催されるIETFミーティングに、毎年、私たちネットワークエンジニアが送り込まれていました。そして、日本に帰国した後、社内で、全ての関連グループ会社の幹部、技術者が集まる大規模なIETF報告会が開催され、私たちエンジニアは、そこで報告を行わなければならなかったのです。

送り込む方は「行け」と言うだけでよいですが、送り込まれる私たちは、それだけでは済みません。

そもそも、私の英語ヒアリング能力が絶望的なことに加え、当時のIETFのミーティングは、私の友人いわく「非英語圏の人間に対して、世界でもっとも不親切な英語(某牛丼チェーン店のCM風に言えば、『速い』『長い』『知らない』の三拍子)を使う」ことで有名な国際会議だったからです(「会話が“速い”」「スピーチのセンテンスが“長い”」「そんな言い回しなんぞ“知らない”」)。

加えて、問題だったのは、この「IETFミーティングに、会社から予想以上に多くのネットワークエンジニアが派遣された」ことです。私の会社には、複数の研究部門があり、それぞれの部門から異なるセクションの報告がされることになります。

これが――まずかった。

IETFミーティングに派遣された者たちは、その報告会で各セクションの動向を、パワーポイントにまとめて、プロジェクトにデカデカと表示しながら説明をしていました。

その発表の途中で、ある部の部長が、言い出しました。「今の江端君の報告内容は、さっき発表してくれたA君の内容と矛盾するのではないか」

――来た!

異なるセクションの報告ではあるものの、発表内容は重複する場合があります。



そもそも私の報告は、IETFミーティングの内容を正確に伝えているわけではありません。「英語に愛されないエンジニア」が、「世界でもっとも不親切な英語によるミーティング」の内容を、正確に持ち帰ることなどできるはずがないのです。



さらに、凍りついた私に対して、場の空気を読まない若いエンジニアの一人が、「Bさんの内容とも、合いませんねえ」という、ひと言を発しました。――が、彼は、そこから先、何も言えなくなりました。レーザー光線と同程度の威力を持つ、私の憎悪の視線に射貫かれたからです。

―― お前、今、身内の背中を撃ったな

という、憤怒のメッセージを一瞬で理解したのだらうと思います。

もう、そこから先の私の発表はボロボロでした。

Aさん、Bさん、私の3人は、なんとかつじつまを合わせるために、3人がマイクが握って、しどろもどろの論理付けを試みたのですが、何せ予想もしていなかった事態なので、その場で、一致した見解になるのは到底無理な話でした（今思い返すと、私だけでなく、他の2人も、IETFミーティングの内容をよく分かっていなかったような気がします）。

ついに、研究所の幹部が「まあ、ちゃんと話をしておけよ」と、その場を収めました。この事件は私に教訓を与えました。

英語をしっかりと勉強しなければ――などとは、これっぽっちも思わなかったのですが、同じ会社の所員が同じミーティングに参加したのであれば、その情報を事前に察知して、当然に「根回し」しておくべきだったのです。

しかし、この程度のトラブルは、まだ大したことではありませんでした。

私がこの報告会后、心底驚がくしたのは、「私が作った、えーかげんなIETF報告書」の内容が、インターネットを通じて日本中に流布されている様子を、目の当たりにした時です。IETFはオープンな（と言われている）会議なので、私の情報もそれに準ずる取扱いをされたのだと思います。

「英語に愛されないエンジニア」である私の「えーかげんな報告」が、それが唯一無二の真実であるかのように日本の通信機器メーカーに広まっていく恐怖をご理解頂けるでしょうか。私の報告を参照したために、日本中の通信機器メーカーが、間違った仕様の製品を製造し、販売してしまったら――そう考えるだけで暗たんたる気分になり、その日、生まれて初めて、検索サイトで「切腹」の作法を調べてしまいました。

しかし、これらの事件によって、私の中で別の考え方が生まれてきました。「もし、これが私――

人だけの発表であつたらどうだつただろうか」、「私の不正確な報告は、100%不利益だつたと言ひ切れるだろうか」と。

私のエンジニアとしての常識が、思わぬ方向へ組み換えを開始していると感じたのは、この時だつたと思います。

こんにちは、江端智一です。

今回は本連載の最終回、「報告編」となります。

業務報告のプレゼンテーション\*1)や、報告書の作成方法\*2)については、既に詳細を説明しましたので、今回は方法論は割愛し、報告のマインド面についてお話ししたいと思います。

\*1) [非核三原則に学ぶ、英語プレゼンのポイント](#)

\*2) [プレゼンテーション資料はラブレターである](#)

全ての業務には必ず報告が必要です。会社の命令と資金によって出張してきた以上、業務報告は当然の義務です。

業務報告には、大きく2つの方法があります。

- (1) 裏の取れていない不確かな情報を排除して、確認した情報のみを淡々と報告するもの
- (2) 不確かな情報も取り込み、一つのストーリー(シナリオ)を創作して報告するもの

(1)については、意思決定を他人(幹部とか上司)任せにできるという気楽さがあり、また、サラリーマンの保身の観点からお勧めできます。ただ、このような断片的な情報の破片による報告の結論は、曖昧なものになります。第二次世界大戦中、英国首相のチャーチルが、このような外務省や諜報機関からの報告に「キレた」という話は有名です。

(2)は、(1)のメリットとデメリットが入れ替わることになりましたが、第二次世界大戦中に、日本国のドイツ大使が、日本政府に、行きすぎた仮説や推測に基づく報告を繰り返し、日本の外交方針を誤らせたという話があります。

業務報告は、客観的かつ具体的に行う必要がありますが、海外出張の報告は、これだけでは十分ではありません。

大切なのは「空気(雰囲気)」を報告することです。実際に現地にいる者による現地で感じた所感が、会社の意思決定に多大な影響を与えるからです。単なる事実や数値の積み上げではない、ライブ感あふれるホンネの生情報にこそ価値があるのです(関連記事:[誰も望んでいない“グローバル化”、それでもエンジニアが海外に送り込まれる理由とは?](#))。

いずれにしても、業務報告が、私たちの会社と私たち自身の命運を決定する重要なミッションであることには間違いがありません。

□

しかし、私たち「英語に愛されないエンジニア」には、上記の(1)、(2)を選ぶ余地はありません。

例えば、私の英語スキルは、「確かな情報」ですら「不確かな情報」に変えてしまうほどお粗末なものであり、ストーリーとして組み上げるだけのネタも残らないのです。

すると「不確かな情報」のみをベースとして、ストーリーの構築を行うことになるのですが、自分ですら信じていないストーリーを報告することは、エンジニアにとっては苦痛以外の何ものでもありません。

それは、エンジニアが、基本的に真面目で、誠実で、正直で、純真で、そして裏表のない素直な性格をしているからです(私もエンジニアです)。

なぜ、エンジニアがそのように振る舞うのかというと、そもそも、私たちエンジニアが開発する回路や装置やシステムが、そのように取り扱わなければ、絶対に動き出さないモノであるからです。

そのようなモノと対峙する日常は、私たちエンジニアを、確実なものだけを信じ、不確かであやふやな情報は排除するような人間に変えてしまうのです。

エンジニアたちが、業務を遂行していく上で、「英語」という不安定で不確実な情報源を遮断しようとするのは、むしろ当然と言えます。それは生物の免疫機能が、ウイルスを駆逐するのと同じことです。

つまり、「英語に愛されないエンジニアが存在している」というよりは、そもそも、「エンジニアは、英語とは一緒に生きていけないようにできている」のです。

しかし、世の中は(特に「グローバル化」というやつは)、エンジニアである私たちに、英語という名の「ウイルス」を保有したままで、生きろと命じます。ならば、私たちエンジニア自身が、自らを改造していくしかありません。英語という「ウイルス」に対する抗体を得なければ、私たちは、エンジニアとして生き残ることができないからです。

## ヘイトスピーチに学ぶ、出張報告の極意

---

前述した通り、エンジニアは毎日、回路や装置やプログラムを取り扱っているため、矛盾したロジックというものに慣れていません。ホンの一部でも、矛盾や論理破綻を指摘されると、いきなりパニックに陥ってしまうというモロさもあります。

しかし、特に海外業務の業務報告において、「完全な情報」に基づく「無矛盾な報告」というのは、不可能です。エンジニアたちが、そのようなマインドを維持している限り、いつまでたっても業務報告は完了しません。

そこで今回、この課題を解決する手段の一つとして、「カルト宗教の教祖のマインド」や「ヘイ

トスピーチ」に学ぶ方法を提案したいと思います。

彼らは、「破綻したロジックを公言しても恥ずかしいと感じない(思わない/思えない)」「人の意見を聞かない(理解しない/理解できない)」という、まれな能力があります。

これからのエンジニアは、このような彼らの劣悪な資質を、優れた特性に転換した上で、自らに取り込んでいく必要があると考えます。

「根拠なく自分を信じること」、「論理破綻した信念を持ち歩けること」、そして「自分の味方は自分自身だけと思いきめること」。

「英語に愛されないエンジニア」には、特にこれらのマインドが必要とされる時代になってきているのだと思います。従来のドメスティックな世界においては、意思決定は一部(会社の幹部など)の人間に委ねていれば足りましたが、「グローバル化」という訳の分からない世界においては、意思決定の場が、末端まで降りて来る場合もあるのです。

そして、今後、この「グローバル化」なるものの業務形態は、最終的には「たった一人の軍隊」になるだろうと考えています(関連記事:[海外出張に行くあなたは、「たった一人の軍隊」である](#))。つまり「世界の果てで闘う私の味方は、私だけ」という時代になる。そんな世界で「客観性」だの「オープンマインド」などと言っている余裕はありません。



画像はイメージです

ロジックで武装された世界は、私たちエンジニアにとっては、ヌクヌクとコミットできる心地よい世界でした。しかし、もはやロジックだけで、このえたいの知れない「グローバル化」を生き残るのは難しいのです。もちろん、潤沢な人材と金と時間があれば可能なのかもしれません、そのような環境は過去に存在したことがなく、そして将来も存在しません。

だからこそ、「人の意見を聞かない」という「クローズドマインド」が重要になってくるのです。

## 暴走ありきの“クローズドマインド”でよい

---

検討するまでもなく、「クローズドマインド」には問題点が山ほどあります。特に、客観性が担保されない業務報告は、会社を誤った方向に導き、多大な損害を与えることになりかねません。

でも、大丈夫です。

私たちが間違っていれば、必ず誰かが私たちに止めてくれます。会社が複数の社員を雇用しているのは、そこにチェックアンドバランスを持たせるためでもあるのです。

何より、会社という組織は、何かをやろうというアクションに対して、それをストップさせる巨大な権力を持っています。出向、異動、左遷、解雇 ―― ほとんど、無制限と言ってもいいくらいの種類の強制停止システムが常に稼働状態にあるのです。

だからこそ、私たちは、「クローズドマインド」で安心して暴走してよいのです。

それに、私たちが誤った選択をした場合の結末は、最悪でも「会社の倒産」です。社員には多大な迷惑を掛けることとなりますが、それでも戦争のように多くの人が死ぬわけではありません。ここが、「カルト教団」や「ヘイトスピーチ」と、「クローズドマインド」との決定的な相違点となります。

□

では、今回の海外業務報告における「クローズドマインド」をまとめてみたいと思います。

- (1) 「自分の主観的な思い込み」を基軸に置いた報告を行って構わない。断片的な情報の羅列よりは、はるかにマシな報告となるからである
- (2) 「完全な情報」に基づく「無矛盾な報告」という考え方は捨てる。そんな報告は、そもそも不可能だからである
- (3) 「自分の中だけで閉じたロジック」で報告会を乗り切つてよい。実際に現地に行き、そこで聞きし、会話をしてきたのは、唯一「この私」だけだからである
- (4) そして、仮に「この私」が誤った方向に暴走していたとしても心配する必要はない。組織は、私たちが簡単に止め得る権能を持っているからである。

□

以上をもちまして、「「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論」を完了させていただきます。2年間、総計32回に及ぶ連載にお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。

ここで、連載のあとがき、感想、そして謝辞と続くところなのですが、書いていたら大変長い文章となってしまいましたので、これをまとめて、もう一回掲載致します。

次回「総括編」にて、私から皆さんへの最後のメッセージ、

「「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論」とは、「愛」である

をお贈りして、お別れしたいと思います。

---

[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。

---



## Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi\\_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

## 関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

